


■ 人間関係研究へのアプローチ

View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

brought to you by  CORE

人間関係トレーニングにおける「学びの深さ」の次元の探究

山 口 真 人
(人文学部心理人間学科教授)

私の研究的オリエンテーションは大学院でのグループダイナミックス（集団力学）の研究に始まる。第二次世界大戦後のアメリカでクルト・レビンが創始し、小集団内で生じる現象を、条件を統制した実験室的状況の中で研究する社会心理学の一領域である。

私の最初の研究は30年以上も前のことになるが、リーダーのリーダーシップスタイルの違いが小集団の生産性と生産性に関する集団規範の形成にどのような影響を及ぼすかを、リターンポテンシャルモデルを用いて実験室実験として厳密に研究したものであった⁽¹⁾。独立変数としてのリーダーシップを統制するためにリーダー役の大学生の実験協力者をトレーニングしたり、集団作業をしてもらう小学生を確保するために小学校に協力要請をしたり、準備にも多大な時間がかかった。また、得られた膨大なデータを解析し統計処理するためのコンピュータプログラムを作成し、今のパソコンの足元にも及ばない性能ではあったが当時の大型コンピュータで苦勞して処理をしていた。データやプログラムは紙テープに穿孔して作成していた。ちょうど紙テープからIBMカードへと切り替わっていく頃であった。

ただでさえ集団現象というのは複雑で心理学的研究の難しい領域であるが、私の関心は、条件統制の比較的容易な課題志向集団よりも、青少年のグループ活動などの成長志向集団の方であって、大学院では主にグループワーカーやグループリーダーのリーダーシップがグループメンバーのパーソナリティの成長やグループプロセスにどのような影響を与えるかを研究していた⁽²⁾。青少年のトレーニングキャンプやサマーキャンプ、勤勞青少年ホームなどのグループワークの場を借りて研究していたが、特に子供や青少年の人間的成長を測定する従属変数をどう設定し、どう測定するかに苦勞していた。

平行して製鉄所や紡績工場などの生産現場での監督者のリーダーシップ調査やモラールサーベイに参加したり、学部生の卒業論文の指導などをしながら、大学院の5年間でいわゆるアカデミックな研究的オリエンテーションを身につけていった⁽³⁾。

＊

＊

＊

大学院修了と同時に南山短期大学人間関係科に職を得た。この時人間関係科の独創的な教育については十分理解していなかったが、Tグループを授業で実施しているという説明に大変興味を持った。大学院時代にエンカウンターグループのメンバー体験をしていたが、グループダイナミックスによって人間に大きな変化や成長を起こすといわれているTグループについては、文献の上で知るのみで体験したことがなかったからである。

人間関係科での教育体験は私に大きな変化を与えた。この学科はラボラトリー方式の体験学習法を使って授業し、学生の人間関係的成長を促進することに明確な目標を定めているところに特色があった。この教育の場に身を置くことになって、私自身の研究的オリエンテーションは大転換をした。

従来の大学教育は、既存の学問的成果を効率よく伝達することと、研究対象を客観的に（対象物として）分析考察する研究方法を伝授することを目的としている。人間関係の研究領域に即していえば、これまでに仮説された理論と実証的に検証された成果を伝達することと、自分を含まない人間関係や自分以外の他者を対象化して取り扱う方法を科学的方法として伝授するのである。これに対して人間関係科の教育は、自分の体験を通して自分の心理や行動を仮説化し自己成長に取り組むことと、自分や他者および人間関係を、対象化せずに自分との関わりの中で理解し変革していく方法を伝授することを目的としていた。

私自身がこの違いを十分に受容するには、当時、第三の心理学といわれた人間性心理学やトランスパーソナル心理学の主張、要素還元的な科学観からホリスティックな科学観への方法論的転換の必要性の主張、量的データよりも質的データを重視する新しい人間科学の方法論の主張などの助けが必要だった。

人間関係科赴任当時の私は、私自身が大学院でトレーニングされた科学的研究法と学問的知見を学生に習得してもらうことが大学教育の目的であると思っていたので、学生がアンケート調査を実施したいという時には、調査法や統計学を教えておかなければいけないと考えて自分の担当授業の中で講義をしたりもした。しかし、当時の学科長メリット教授が授業計画を立てるスタッフミーティングの中で、時折、そのことを教えることは学生の成長にとってどんな意味があるのですかと問うことに気づいた時に、自分が教育に携わりながら、学生自身の人間的成長というよりも、教師の側の学問的要求に従って授業計画を立てていることに気づかされた。また当時、文部省の科学研究費を受けてTグループの研究に取り組んだ。しかし、研究者としてTグループのトレーナー

の介入を研究しようと思っても、自分自身のトレーニング経験の程度に応じてしか現役トレーナーのしている世界や語る言葉を理解できていないということに気づいた。このことによって、この領域では外部者としていわゆる科学的に研究できることの限界を感じると同時に、自分自身がトレーナーとしての経験を積むことが教育上はもちろんのこと研究上でも重要であると考えようになった⁽⁴⁾。

*

*

*

その後、立教大学キリスト教教育研究所（J I C E）、南山短期大学人間関係科、南山短期大学人間関係研究センターの実施するTグループでトレーナーとしての経験を深め、授業では体験学習による人間関係学習のためのカリキュラムの開発に取り組んで、「自分史」「ヒューマンドキュメント」「フィールドワーク」「コミュニティ」などの独特の授業の開発に携わった⁽⁵⁾。

その後留学の機会を得てカリフォルニア大学サンタバーバラ校の教育学大学院で合流教育を学んだ⁽⁶⁾。合流教育は知性と感性を合流（統合）することを目指す人間性教育の一学派で、学習者の情動的要素を取り扱うためにゲシュタルトセラピーを応用して授業を展開するところに特色がある。そのため私自身もゲシュタルトセラピーのトレーニングをカリフォルニア大学やエサレン研究所で受けたが、この体験によって、Tグループで扱うよりも厳密な「いまここ」を見る目を養えたことや、イメージや過去の出来事を、精神分析的な解釈を排除して「いまここ」の体験として取り扱うことを可能にする技法を身につけたことによって、トレーナーとしての目が緻密になると同時に介入の多様性を身につけることができた。

帰国後はTグループの原理と実際を学ぶ「トレーナートレーニング」や「グループアプローチ」、体験学習の研究をする「人間中心の教育」、絵画制作にゲシュタルトセラピーを応用したワークショップ「クリエイティブ・ペインティング」や「自立のための気づき」、演出家竹内敏晴氏の開発した演劇的方法を用いた「表現による自己成長」、日本とアジアとの関係を考える「アジアセミナー」、人間と自然との共存を考える「自然と人間」、人間関係の原理を学ぶ「人間関係原論」などの授業開発に取り組んできた⁽⁷⁾。

*

*

*

これからの研究的関心はこれまで取り組んできたことの延長ではあるが、以下のような研究に取り組んでいきたい⁽⁸⁾。

1. 人間関係トレーニングにおける「学びの深さ」の次元の探求。

体験学習には様々な学びがある。単に行動のレパトリーを増やすというレベルから、宗教や武道の修行のようにある種の悟りが開けるというレベルまで多様であり、それらが一つの場で同時的に生起している。一つの出来事を、あ

る人は行動レベルで見ているが、別のある人は非常に深い精神性のレベルで見ているし、また別の人は感情のレベルで体験していたりする。これらのレベルはバラバラに存在しているのではなくて、連関のある層構造をなしているように思う。それを学びの「深さ」の問題として探求したい。

2. 成長志向集団のリーダーシップの研究

Tグループや体験学習におけるファシリテーターは学習者が体験から学ぶことを援助する役割を担っているが、先に述べた学びの「深さ」に着目した場合、より深い学びを実現する（体験学習の質を高める）ためにの介入のあり方について研究したい。

3. 日本の学校教育現場に即した人間性教育を考える。

学校教育の中で、教科内容ばかりでなく学習者の人間性や人間関係の成長を促進する教育の方法を探究したい。特に義務教育段階での現場での取り組みを援助したい。

4. 人間中心の医療・看護・介護実現のための教育プログラムの開発 医療・看護・介護等の教育プログラムの中に人間関係トレーニング的視点を導入することと、人間中心の医療・看護・介護を実現できるように現場の組織作りや教育訓練を援助したい。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

注

1) 佐々木・山口、リーダーシップ・タイプが集団規範の形成に及ぼす効果の実験的研究、関西学院大学社会学部紀要第22号、1971年

山口・佐々木、リーダーの先有傾向と役割がリーダーシップタイプに関する成員の認知と生産性に及ぼす効果、日本グループダイナミクス学会「実験社会心理学研究」第11巻1号、1973年

2) 山口、グループ・ワークに関する集団力学的考察 — 特にリーダーシップが集団活動に及ぼす効果の実証的分析 —、関西学院大学大学院社会学研究科修士論文、1972年

山口・佐々木、訓練キャンプの集団力学的研究、関西学院大学社会学部紀要第23号、1972年

山口・佐々木、訓練キャンプの集団力学的研究II、関西学院大学社会学部紀要第26号、1974年

山口、サマーキャンプにおけるワーカーのリーダーシップとその効果に関する実証的研究、南山短期大学紀要第5号、1977年

3) 佐々木・山口、某製鉄所従業員意識調査、関西学院大学社会学部紀要第29号、1974年

佐々木、組織の発展を目指して：現状と問題点、神戸市消防局、1973年

佐々木、組織の発展を目指して（続）：実践と分析、神戸市消防局、1974年
佐々木、組織の発展を目指して（続々）：小グループ制の実践と評価、神戸市消防局、1979年

4) 星野・山口、大学教育へのTグループ適用の試み、南山短期大学紀要第7号、1979年

津村・山口、Tグループの発達課程に関する研究、南山短期大学紀要第9号、1981年

5) 山口、南山短期大学人間関係科の10年人間関係基礎論III（社会学的基礎・同演習）、南山短期大学人間関係研究センター紀要「人間関係」第2・3、合併号1985年

山口、南山短期大学人間関係科の10年人間関係各論II（組織・集団に関する領域）、南山短期大学人間関係研究センター紀要「人間関係」第2・3合併号、1985年

山口、南山短期大学人間関係科の10年人間関係総合実習（合宿）、南山短期大学人間関係研究センター紀要「人間関係」第2・3合併号、1985年

星野・山口、専門科目総合実習にみる人間関係の体験学習－その理念、南山短期大学人間関係科通信No.1、1979年

山口、人間関係の心理学的・社会学的基礎－生きた現実にかかわる学習、南山短期大学人間関係科通信No.2、1980年

山口、人間関係の心理学的・社会学的基礎－自己生活史・形成史づくり、南山短期大学人間関係科通信No.3、1980年

山口、対話とグループ形成の総合実習－Tグループ合宿、南山短期大学人間関係科通信No.5、1981年

山口、グループ・ダイナミックス、南山短期大学人間関係科通信No.5、1981年

山口、フィールド・ワークってどんなもの？、南山短期大学人間関係科通信No.16、1987年

南山短期大学人間関係科、人間的社会を切り拓く教育の冒険－フィールドワーク報告、南山短期大学人間関係科、1994年

山口、フィールドワークについての学生の発表と教員のかかわり方、日本カトリック短期大学連盟、1994年

6) Mahito Yamaguchi, A PRACTICAL APPLICATION OF CONFLUENT EDUCATION FOR JAPAN, UC Santa Barbara (Master theses), 1983

7) 山口、対人感受性の開発－人間関係トレーニングの理論と実際、南山短

期大学人間関係研究センター紀要「人間関係」第5号、1988年

山口、Tグループ、星和書店「心理臨床」第2号(4)、1989年

山口、Tグループ、至文堂「現代のエスプリ」385、1999年

山口、クリエイティブ・ペインティング、南山短期大学人間関係研究センター紀要「人間関係」第4号、1987年

山口・グラバア、人間関係基礎論II B 自己表現、南山短期大学人間関係科通信No.13、1986年

山口・竹内・土谷、大学における演劇を用いた授業の展開－各論「表現による自己成長」、南山短期大学人間関係研究センター紀要『人間関係』第17号、2000年

山口、アジアへのアプローチ、南山短期大学人間関係科通信No.14、1986年

山口、自立のための気づき、南山短期大学人間関係科通信No.24、1991年

山口・グラバア、大自然の中で人間の未来を考える－各論「自然と人間」、南山短期大学人間関係科通信No.25、1992年

山口、教師のためのセミナー、南山短期大学人間関係研究センター紀要「人間関係」第6号、1989年

山口、原論元年後期の人間関係原論・－欲張りな授業が残したもの－、南山短期大学人間関係科通信No.22、1990年

竹内・グラバア・中野・山口、授業記録：人間関係原論－学生とともに人間関係の原点をさぐる、南山短期大学人間関係研究センター紀要「人間関係」第9号、1992年

まどか・伊藤・大森・山口、実習を作る、南山短期大学人間関係研究センター紀要『人間関係』第17号、2000年

8)野島（編）、グループファシリテーターの養成をめぐって、日本グループ・アプローチ研究会、1985年

山口、人間関係科の教育における個と集団－関係に定位した教育の実現をめざして、南山短期大学人間関係研究センター紀要「人間関係」第5号、1988年

山口、人間関係の変革－社会的感受性と人間関係のスキル、南山短期大学人間関係研究センター紀要「人間関係」第6号、1989年

青木・山口、ボランティア活動と生涯学習－いのちの電話活動におけるボランティア相談員の成長、南山短期大学人間関係研究センター紀要「人間関係」第8号、1991年

山口（編）、学校教育システムの中でのグループ・アプローチ、日本グループ・アプローチ研究会、1991年

山口、教育者のための人間関係体験学習ガイド、百芳教育研究所紀要「百芳教育」第8号、1994年

野島（編）、グループ・アプローチの危険、副作用とそれへの対応、人間関係研究会「ENCOUNTER」第21号、1996年

山口、ヒューマニスティック・エデュケーションの光と影、日本人間性心理学会「人間性心理学研究」第15巻第1号、1997年

伊藤・山口、人間性教育を支える学習共同体の育成、南山短期大学人間関係研究センター紀要「人間関係」第15号、1998年